

《Ⅰ. 研究報告》

助成年度 Grant Year	2023 年度
研究テーマ Research Title	外国にルーツをもつ障がい児・者・その家族へのソーシャルワーク実践—ロンドン郊外と東京郊外の比較調査
研究代表者 Representative	三浦尚子
代表者所属機関 Organization	特定非営利活動法人 社会理論・動態研究所
職名・課程名 Position/Program	研究員

①研究概要

研究の背景、目的・リサーチクエスチョン、学術的重要性、対象について記述してください。

【研究の背景】

近年日本では、国際社会と同様、持続可能な開発目標の「誰一人取り残さない」包摂的な社会の構築を謳っている。しかし、日本の出入国在留管理行政（以下、入管行政と記す）は、難民庇護を求める者に対する人権保障が欠落しており、欧米圏と比較して顕著に低い難民認定率や長期的な収容は、国内外から「brutal（野蛮）」政策と揶揄されているほどだ。一方で、難民不認定となって在留資格を失いながらも、「帰国できない」と主張して日本で生活する子どもたちは増加傾向にある。子どもたちが日常的にかかわる学校や病院などの現場では、当事者も対応する側も異文化間で苦勞している。特に、障がい児・者およびその家族は、在留資格の喪失ゆえに必要な社会的資源を利用できずにいる。現在、異文化への理解や誤解が共有される機会のないまま課題が山積しており、ヘイターらの動きも活発化している状況にある。

【目的】

そこで本研究では、難民・移民の受け入れ政策の先達として、英国で展開する移民人街、特にクルド人が集住する地域の一つ、ハーリングイ・ロンドン自治区（London Borough of Haringey）と、スコットランドの首都エジンバラにおける難民および庇護申請者に向けたコミュニティケアに注目する。いずれも、ケアの拠点となるクルド人独自のコミュニティセンターを有する地域である。加えて、宗教的なマイノリティの理解を深めるため、イスラーム教アレヴィー派のコミュニティセンターでの調査を含めている。同地におけるソーシャルワークの実践を含めたコミュニティケアの実相を通して、日本における難民ならびに庇護を求める障がい児・者とその家族への支援の相対化を図り、コミュニティのメンバーが一市民として社会的な不利益を被ることのないよう、課題解消に向けた包摂的なケア・システムの枠組みを提言することを目的とする。

【学術的な意味】

本研究は、ソーシャルワークの大原則である「人間の内在的価値と尊厳の尊重、危害を加えないこと、多様性の尊重、人権と社会正義の支持」に準拠している（日本ソーシャルワーカー協会ホームページ）。昨今、欧米圏の政治体制が右傾化する傾向にあり、難民や庇護申請者が安寧の地を得るのに容易ではない状況が世界規模で起きている。本研究では、異なる調査地においても、精神保健福祉士として「見ること・聞くこと・感じること」（ルーカス 2021）を重視し、クルド人の政治的背景と文化的価値観をメンタルヘルスへと関連付けて考察することで、「多文化ソーシャルワーク」の実践に関わる学際的な研究に掉さすことができると考える。

【対象】

本研究の対象は在英ならびに在日のクルド人である。クルド人は「国を持たない最大民族」と称され、第一次世界大戦後、敗戦国となったオスマン帝国の解体時にトルコ、イラン、イラク、シリアに分割委譲された「クルディスタン」を故郷とする人たちである。日本のみならず、欧米圏やアジア圏等、庇護を求めて世界各地に離散して生活している。

研究対象に選定した英国には、「トルコ語を話す移民」もしくは「トルコ出身の移民」としてキプロス系、クルド系、トルコ系の移民を総称する *Türkiyeli* という用語がある。トルコ本国では民

族間の緊張した状態があるものの、英国ではディアスポラな存在として一括りにされている (Dağdelen and Karakılıç 2011)。ターキッシュ・クルディッシュ・コミュニティセンターのホームページによれば、ハーリングエイ・ロンドン自治区に隣接するハックニー・ロンドン自治区、イズリントン・ロンドン自治区、エンフィールド・ロンドン自治区と北東方面の自治体に、Türkiyeli は約 5 万人が暮らしており、この値は英国全体で暮らす同系の移民の 4 分の 1 に相当するという (Turkish and Kurdish Community Centre ホームページ)。Türkiyeli の移動は、英国とトルコの労働協定によって移住してきた 1970 年代と、政治的な理由で移住してきた 1980 年代以降では様相が異なる。後者の移動の主な主体となったアレヴィー派クルド人は、民族のマイノリティと宗教のマイノリティとで二重のマイノリティを抱えており、当時約 2 万人が英国に流入してきたという (Ebas 1997)。ハーリングエイ・ロンドン自治区はロンドンで初めてクルド系アレヴィー派の市長が選出された地域であり、地元でのクルド人コミュニティの存在感が推察される。

一方、日本では 1990 年代に単身のクルド人男性が、先住するイラン人を頼って移入してきた。その後、家族と親戚を呼び寄せるかたちで、現在 2000 人程度のコミュニティが埼玉県川口市・蕨市に集住している。2023 年の出入国在留および難民認定法改定やクルド人ファミリー間のトラブル以降、クルド人に対するヘイトスピーチが SNS 上に蔓延し排外主義的な雰囲気が高まっている。バーチャルな空間における誹謗中傷に留まらず、埼玉県川口市・蕨市内でのデモンストレーションや盗撮など物理的な嫌がらせ行為が多発している現況にある。

文献

日本ソーシャルワーカー協会ホームページ. ソーシャルワーク専門職のグローバル定義.
<https://www.jasw.jp/about/global/> (2025 年 3 月 28 日最終閲覧)

ルーカス, S. 著, 池田佳奈・久納明里・佐藤愛子訳 2021.『対人援助職のためのアセスメント入門講義』金剛出版.

Dağdelen, G. and Karakılıç, İ. Z. 2011. Disaggregating Citizenship: Transnational partition of the “economic” from the “socio-cultural” in the case of a Turkish community in London. Paper presented at the International RC21 conference 2011.

Ebas, H.1997. Class, ethnicity and identity formation: Immigrants from Turkey in London. ESA Conference on “20th Century Europe: Inclusion/Exclusion”, at University of Essex, 27-30 Aug.1997.

Turkish and Kurdish Community Centre ホームページ. About the community. <https://daymer.org/about-the-community/>. (2025 年 3 月 31 日最終閲覧)

②研究の経過（研究課題Ⅰ）

研究課題Ⅰについて、課題名と実際におこなった内容を具体的に記述してください。

研究課題Ⅰ：クルド人最大の祝祭「ネウローズ Newroz（新しき日）」開催時期となる3月下旬で実施した。春分の日を元日とするペルシア暦をもとにして春の訪れを祝うネウローズは、政治的・文化的・社会的に虐げられてきた歴史をもつクルド人たちの「再生」を祈念した、精神的支柱となる祭りといえる。同センターに最も人が集まる日がネウローズであろう。

実施内容：1）ハーリングエイ・ロンドン自治区にあるクルディッシュ・コミュニティ・センター（以下、KCC と表記する）の活動に関わる聞き取り調査ならびに観察調査

ロンドンには、かつて英領であった旧植民地出身の移民たちを中心に、それぞれの移民コミュニティが形成された多文化都市である（ロス・クラーク 2015）。小泉（2018）が作成した重複剥奪指標¹⁾の階層区分図では、テムズ川の左岸・右岸ともに東部で高い値を示している。ハーリングエイ市議会においても、特に同自治区内の東部において、重複剥奪指標の高さは報告されている（Haringey Council 2023）。ハーリングエイ・ロンドン自治区でクルド系の移民の影響力が顕現している場所は、ハーリングエイ地区（Harringay）²⁾の目抜き通り沿いにある。通りの両サイドに隙間なく軒を連ねる店は、故郷の地名にちなんだ名前のレストランのほか、ピザ屋、故郷の食料品も購入可能なグロッサリーストア、クルド系の食文化に欠かせないチャイ（紅茶）を飲みながら順番を待つ理髪店やヘアー・マニキュア等のサロン、貴金属店など多岐に渡る（写真1）。そこに近接して KCC が立地する。

1. KCC の概要

KCC は、1992 年にクルド労働者協会の成長と発展の結果として設立された難民慈善団体である。同協会は 1987 年、ロンドンに到着したクルド難民のコミュニティが拡大する中で、クルド人の友人たちが集まり、互いに助け合い、新参者のためのレセプション・センターとして活動する必要性を感じた小さなグループによって新設された。開設時期は Ebas（1997）や Dağdelen and Karakılıç（2011）など先行研究で指摘されている政治的な理由による移動の時期と合致する。

KCC では以下 6 つの目的を掲げている。1) 移民、福祉の権利、住宅、健康、教育などの分野における助言を提供し、貧困を救済すること、2) クルド語、アート、文学、文化遺産の保護と促進に努めること、3) 英語、数学など主要な教科を伸ばすための補習校を運営することで、クルドの子どもたちの教育を支援すること、4) 語学のコースと情報技術のトレーニングを提供することで、おとなに対する教育を奨励し、雇用へのアクセスを増やし、彼らが自信を持てるようにすること、5) エンターテインメントやイベントを開催することにより、クルド人コミュニティの社会的・文化的生活を向上させること、6) クルド人の青少年に社会的、文化的、教育的活動を提供することにより、犯罪から引き離すこと、とする。メンバーによれば、KCC は設立当初から 300 万人から 400 万人の避難民に対して支援的な社会的環境と助言を提供してきたという。ハーリングエイ市議会からも、KCC は対クルド人支援に実績があると位置づけられた組織といえる。

2. 施設の特徴

KCC の門を入ると、左手には食堂、正面にはイベントを行う大きなホールがある。このホールがクルドの文化を具現する重要な空間となっている。ネウローズは近くのフィンズベリー公園の一角を貸し切って一般的に開催される祭り（写真2）のほかにも、前夜祭と後夜祭のように KCC

のホールで大学生等の若手のメンバーやより小規模なネウローズが企画されていた。ホールの奥にはビリヤード場、さらに進むと中庭があり、クルド人にとって大切なオリーブの木や小さな畑と東屋があって、新鮮な空気を吸いに、または喫煙しに外で集まって、仲良し同士がホールにあるミニ・バーで入れたチャイを片手に話していた（写真3）。イベントのない日の朝は、近隣に住む高齢のメンバーがチェスに興じている姿やホールの脇に置かれた椅子にゆったり座っていた。片足切断で歩行に障がいを抱える者が、ホームの手前で2本の松葉づえで自らを支えて踏んばって立っていた。それに対して、ほかの者が特別に気にかけて世話をするといった過剰さはなく、そのままを受け入れているという姿勢があった。センターは、黒猫も含めて誰もがふらっと立ち寄ることができるドロップインセンターの役割を果たしていた（写真4）。ホールの片隅にあった机には、法律事務所やカウンセラーの名刺、ほかのイベントのチラシのほか、53社におよぶ協賛者のカラー刷り広告が掲載されているネウローズのパフレットが置かれていた。また、ホールは週末に故人とのお別れ会でも使用されている。

3. 調査の方法

非構造化インタビュー調査ならびに観察調査を採用した。本研究の対象者は難民ならびに庇護申請者で、過去の迫害経験に関連する内容に結びつくシーンが数多ある。本研究は現在進行形のグローバルな政治的課題を扱うため、ソーシャルワークの実践において求められる傾聴を軸に、対象者と言語と非言語のコミュニケーションを繰り返しながら対象者が直面する困難を整理した。情報の開示には注意を払い、個人が特定されないように配慮した。

4. 聞き取り調査の結果

1) 「スタッフ」という用語にあらわれる家父長制への抗いと「自由」の具現

まず、複数のメンバーへの聞き取り調査で印象に残っているのは、筆者の「スタッフは何人いますか」という質問に対して、異口同音に「スタッフ」という特定のカテゴリーはないと言い切ったことである。ある大学生の女性は「どのメンバーでも、ここ（センター）で個々に自分のやりたい内容を提案できるし、それを実現できる環境にある」と誇りをもって語っていた。クルド社会が、従来ファミリーを帰属とする徹底した家父長制でヒエラルキーがあり、女性は（場合によっては若い男性も）いつも父や長兄の決定に従順であることが求められてきた。しかし、メンバーにはその文化的価値観に抗う姿勢がみられた。難民のビザを取得して2年ほどが過ぎたメンバーが「自分が故郷にいたとき、妹が自分のシャツにアイロンをかけていることの当り前さに驚愕したよ」と述べたことから、女性の解放をも強く意識した組織の理念が伝わった。

「夫は外で働き、妻は専業主婦」という伝統的なジェンダー観を維持する傾向にある在日クルド人のコミュニティとの違いに驚く筆者に、英国人の若い女性メンバーは「フェミニズムが成熟したロンドンに拠点があることは勝手が違うでしょう」と応答した。日本社会におけるフェミニズムの未成熟さが、在日クルド人の社会固有のジェンダー観に一石を投げられないでいるということに気づかされた場面であった。また英国人の女性メンバーの存在は、クルド社会が閉鎖性の高い社会ではなく、望む者は人種・民族・ジェンダーを問わず受け入れられるという「自由さ」をもっていることのあらわれといえよう。

2. 祝祭空間で語られた過去の迫害経験

ネウローズの開催期間の前後は、普段から同センターを利用している者以外の者も来訪しており、ルーツはトルコのみならず、イランやシリアにある者が含まれた。参加者の衣装は主に、男性はカーキや黒の同色の上下に黒のブーツ、スカーフを腰や首、頭に巻いているスタイルで、女性は袖も丈も長いカラフルなドレスか、男性と同じスタイルをまっていたが、後述するエジンバラ同様、日本よりも普段着で参加する者が多い印象を受けた。

フィンズベリー公園で開催されたネウローズは 2024 年 3 月 17 日 12 時から 18 時まで開催されたが、KCC のホールで二日後に開催されたネウローズは 18 時ころから深夜にまで及び、こちらも終始盛況であった。若手のメンバーによる開会式の宣誓後、ホールをすべて埋め尽くすほどに、参加者は円を何重にも作って踊っていた。ホール正面の舞台では数人の歌手が交代で盛り上げ、最後にホール外で火を焚き、その上を複数の若い男性が次々と飛び超えるという、まるで「火を制す」ようなパフォーマンスをみることができた。その後花火が上がり、祭りの高揚感がセンターを包んでいた。

迫害経験に関わる内容を英語で語ってくれたのは、①学校に通っていたころ、突然クルド語の教科書を焼き捨てるよう言われて焼かれていくさまを凝視したときに、自らのアイデンティティを踏みにじられたと強く思い、ヨーロッパに渡って、それ以降故郷に足を踏み入れることはできないし、新天地も決して望ましいところではないと語った高齢の男性、②エンジニアとして社会的な地位を確立し、金銭面では裕福な暮らしを得ているものの、自らはディアスポラな存在であることには変わらないということ、そして今なお故郷で迫害を受ける仲間を思うと心が痛むと述べた中年の男性、③本国で投獄された経験もち、英国に渡ってがむしゃらに英語を覚えたんだと穏やかに話す中年の男性は、自分はただ自分らしく生きたいと望んでいるだけなのだと強調した。また、④故郷にいるときは夜中に突然自宅に何度も当局が来て、自分も家族も生命の危険があったため、故郷を離れる決断をしたときに母親から、「あなたと別れるのはさみしいけれども、これから私は夜中に眠れるようになるのね」と言われたと切なそうな表情を見せた若手の男性、そして、⑤わずか 11 歳で家族全員がホームレスとなった女性が、路頭に迷いつつも英国に来て、教育を受けた後、成人してロジャバに渡り、そこで腹部に銃で撃たれたと語った若い女性であった。

難民や庇護申請者が迫害経験を語るうえで PTSD が出現する点については、Loyd et al (2018) もトルコにおける難民認定審査のインタビューにおいて再現されると指摘している。初めて自らの経験をこの地で語ったと述べた⑤は、インタビュー途中で過呼吸を起こした。④は、これ以上は涙を見せたくないと、語ることをさりげなく拒否して離席し、煙草を吸いに行ったあと、舌を出しておどけてみせた。上記の 5 人に共通しているのは、過去で起きた経験を話している過程で自然と涙がこみあげ、語りが何度か中断されたこと、故郷に帰ることを夢見ていること、移住先で在留資格を得ても満たされず、たとえ数十年たっていたとしても迫害経験の記憶は鮮明なままで、心を傷つけ続けているということである。

3. 心の拠り所を探し続ける

一方、英語は話せないからと、ロングのインタビューに応じる自信はないけれども、筆者と祝祭の準備や踊りの練習をする合間にボソッとつぶやいた 10 歳代から 20 歳代の男性たちは、異口同音に「ロンドンが好きではない」、「ここは自分のホームではない」ことを強調した。20 歳代後

半の男性は「自分は若くないから」とつぶやき、新天地への希望を抱くこと自体、半ば諦めている様子であった。彼らは、理髪店や飲食店、建設業（解体業に限定されない）等で働いており、筆者の感触としては、決して英語を話せないわけではない。ただし、多文化社会のロンドンにおいて、人権意識は高いもののマイノリティに対する差別意識は根強く残っている。Georgiou (2017) は、ハーリングエイにおいて同じ民族間の紐帯はかたく結ばれているものの、ほかの人種・民族とはいがみ合っているわけではないが交流自体はきわめて消極的で、都市の再開発によって「ジェントリフィケーション（居住者の中産階級化）」が加速する中で、ますます「共生社会 *conviviality*」の実現は難しいと語っている。学校教育に組み入れられず、言語習得に苦手意識を強くもつ若年層は、現役大学生のメンバーとの語りと比較すると同じ民族間においても差があった。それは、難民・移民政策の先達である英国においても今なお喫緊の課題であることが理解された。

3) 実践報告 エジンバラのクルディッシュ・コミュニティ・センターの活動内容

KCC 主催によるエジンバラのネウローズは、2024 年 3 月 24 日にエジンバラ南西部にある KCC と隣接する公園で開催された。エジンバラのクルド人コミュニティはロンドンよりも小規模で、公園で借りられたネウローズの広さも舞台も小規模であった。ロンドン・フィンズベリー公園のネウローズでは、クライマックスに参加者が一同に手を掲げてスマートフォンで舞台上の歌手を撮影しつつ、前のめりで一緒に情熱的に歌ったとき、物理的にも心理的にも筆者が埋もれるほど圧倒されるものであった。片や、エジンバラでは踊るスペースを囲むように木立のあいまに椅子が多く準備され、高齢者や家族連れが座って舞台や踊りをみるスペースがあり、情熱も活気も十分ななかにほんわかとした雰囲気があった。ただし、舞台に登壇したメンバーには市議が含まれており、ロンドンのように手紙で祝いの言葉が代読されるようなことはなく、国際的に活動する若手の活動家や法学者などがすぐ挨拶をかわせるような環境があった。スコットランド人とクルド人の気概に親和性が感じられる瞬間であった（写真 5）。

祝祭の次の日以降、エジンバラにおける KCC の中心的な若手のメンバーがセンターの基本方針と活動内容を説明してくれた。組織が掲げる目的はロンドンと同じで、プログラムにはカウンセラーを招聘してメンタルヘルスのケアについてメンバー同士で学ぶことがあるという。ソーシャルワーカーについて尋ねると、むしろ訝しげな表情で「なぜ必要なの」と逆に質問された。むしろメンバーは各々がソーシャルワーカーの素質をもっていて、行政の手続きや居宅の世話など、何か困りごとがあれば、エジンバラの先輩たちが率先して助け合うというのが当たり前だからという説明がかえってきた。彼からは、常に組織のメンバーとしての誇りが伝わった。

エジンバラのセンター内では「他者への誹謗中傷禁止」を定めていると教わった。ロンドンでは特に聞かなかったが、「HEVAL、HEVAL（クルド語で友達を指す）と中傷を論すような場面や、怒り心頭のメンバーの言い分を根気強く 1 時間以上聴いていた年長のメンバーの関わりをみると、組織の中で相手のエンパワメントを促進するソーシャルワークの基礎があるといえる。

注

- 1) 重複剥奪指標とは、生活資源を奪われた欠乏状態を剥奪と捉え、所得、雇用、健康と障がい、教育・職業技術・職業訓練、住宅とサービス、犯罪、生活環境と 7 つの領域 (domain) で算出した数値に、政府が示した加重 (weight) を施して測定したものである (山本 2011)。
- 2) ハーリングエイ・ロンドン自治区を示すときの表記は Haringey, ハーリングエイ・ロンドン自治区内の一つの地区を示すときの表記は Harringay と使い分けられている。

【文献】

- 小泉 諒 2018. ロンドン 2012 年大会開催と都市計画事業. 荒又美陽・大城直樹・山口 晋・小泉 諒・杉山和明. 東京オリンピックについて考えるーグローバル化, 都市・地域開発, セキュリティ. E-Journal GEO 13(1): 273-295.
- 山本 隆 2011. イギリスにおける貧困への視座と対策ー労働党時代の貧困・地域再生政策の検証. 海外社会保障研究 177: 15-30.
- ロス, C. ・クラーク, J. 著, 大間知知子訳. 2015. 『ロンドン歴史図鑑』原書房.
- Georgiou, M. 2017. Conviviality is not enough: A communication perspective to the city of difference. *Communication, Culture and Critique* 10:261-279.
- Haringey Council 2023, *Haringey at a glance*.
- Kurdish Community Centre ホームページ. KCC. <https://www.kurdishcentre.org/kcc/> (2025 年 3 月 27 日最終閲覧)
- Loyd, J.M., Ehrkamp, P. and Secor, A.J. 2018. A geopolitics of trauma: Refugee administration and protracted uncertainty in Turkey. *Transactions of the Institute of British Geographies* 43: 377-389.

②研究の経過（研究課題2）

研究課題2について、課題名と実際におこなった内容を具体的に記述してください。

研究課題2：宗教的マイノリティにあたるイスラーム教アレヴィー派のコミュニティセンターで聞き取り調査と観察調査

実施内容：2024年9月に、イスラーム教アレヴィー派のコミュニティセンター「ロンドン アレヴィー カルチュラルセンター アンド ジェメヴィ London Alevi Cultural Centre & Cemevi」を訪問し、施設見学ならびに宗教的な実践の一つとして重視される葬儀に参列した。アレヴィー派は預言者マホメットの女婿で一時期イスラーム教主だったアリーを神格化した宗派で、一神教で豚肉（猪肉）を食べない点はほかの宗派と共通するが、男女平等を原則とし、コーランを読まず、ラマダンの時期に断食せず、魂は輪廻転生し、飲酒は自由である（小島 1991）。宗教上の教義や実践が異なることで、ほかの宗派から異端視され、迫害の対象となった。

同センターはエンフィールド・ロンドン自治区にある同派の British Alevi Federation のコミュニティセンターよりも後に設立された。同センターは、自治体の補助を一切受けず、メンバーの寄付のみで作った自慢の施設で、祈りを捧げる部屋には同派にとって象徴的な存在がステンドグラスや大判の壁画に描かれている。葬儀を取り仕切るホールは別にあり、小規模の部屋で楽器や言語、子どもに人気のクラシックバレエを習得するプログラムもある。筆者が訪問した日は18時から礼拝が執り行われた。17時以降から徐々にメンバーが集まって、中庭や喫茶室でチャイを飲みながら葬儀開始を待っていた。メンバーの一人が遺体を清めることがしきたりで、ほかのメンバーは「彼の仕事が大切なのだ」と語っていた。そのメンバーが中庭に戻り、会場が整って葬儀は始まった。女性の指導者が30分以上祈りを捧げていたが、男女平等を謳う同派においても、指導者は2人のみであるという。

ロンドン在住のクルド人の知人によれば、同センターのメンバーとして熱心に活動に関わる信徒は、トルコやクルドといった民族よりも、自らを「アレヴィーの人」として位置づけられているという。民族的な同化圧力と宗教的な同化圧力に晒され続けた政治的な背景があり、研究課題1とは異なり、同センターでは「クルド」という言葉を一切耳にしなかった。また、KCCのメンバーにおいても、クルド社会における互助の精神は、ファミリー内に完結する傾向にあり、これは宗派にも通ずるとして、支援がその範囲に限定されることへの懸念を示した。2023年5月に訪問した British Alevi Federation ではクルドとアレヴィーという二重のマイノリティが強調されていたこともあり、宗教的なマイノリティ・コミュニティにおける文化変容を踏まえて、日本でも一定数存在するアレヴィー派の人たちが存在することから継続的な調査が必要といえる。

【文献】小島剛一 1991. アレヴィー教徒. 『トルコのもう一つの顔』76-86. 中公公論新社.

②研究の経過（研究課題 3）

研究課題 3 について、課題名と実際におこなった内容を具体的に記述してください。

研究課題 3：在日クルド人障がい児・者とその家族へのソーシャルワーク実践

実施内容：2023 年から 2024 年にかけて、特に集中して関わった対象者は、小児慢性特定疾病の一つで、日本では症例がほとんどないビオチニターゼ欠損症を患う、日本生まれで当時小学校 1 年生の女兒と両親であった。両親が難民不認定となって在留資格を喪失した女兒は、住民票の除票を余儀なくされ、「仮放免」という制度に移行した。結果、それまで受給できていた小児慢性特定疾病の保険からも外れ、受診時に血液検査があれば医療費 50000 円程度を負担しなければならなくなっていた。まずは支援の状況と各行為者の困りごとを集約すべく、小児科医（2 名）、小学校教員、療育支援（難聴）の専門家、弁護士とコンタクトを密にとった。特に、難民庇護を求める者の支援者として弁護士は欠かせない。このケースにおいても、担当弁護士から 2021 年 8 月に、総務省自治行政局住民制度課外国人住民基本台帳室によって、難病に関わるケースは在留資格の有無にかかわらず行政サービスの提供の対象になることが通達されていることを教えられた。ただし、ほとんどの地方行政の担当部署でこの内容は周知されていなかった。地方行政にとって仮放免者は「住民登録されていない＝（イコール）存在していない者」であるということ、それを職員が口にすることが憚られないことに、日本で難民および庇護申請者に対する理解や人権保障の観点が欠落している点が指摘される。

ソーシャルワークの実践を通じて、最終的に小児慢性特定疾病の再受給が自治体に認められた。その後、難病や児童福祉関連を担当する国会議員へアクションを取り、2024 年通常国会で厚生労働大臣に省庁としての立場を明確化させ、改めて令和 6 年 3 月 24 日付の事務連絡で小児慢性特定疾病対策 Q アンド A 一部改正が地方自治体の担当部署に一齐配布されることとなった。当該の女兒と家族へのインテーク（初回面接）から、1 年 3 カ月経て集中的な支援の区切りをつけ、2025 年現在は見守り支援へと移行している。

アセスメントの過程で、個々の支援は想像以上に手厚かったものの、ケアの体制としては関係各所間のつながりが乏しく、特に行政のケアが脆弱であることがわかった。ソーシャルワーク実践のポイントとして、入管行政という国家レベルのマクロな視点と、地方行政や地元の病院と学校教育というローカルな視点を行き来しながら、周囲を巻き込んでケアのチームを作り上げたことが挙げられる。アプローチには常に「フットワーク軽く、あきらめ悪し」の姿勢で、ケアの実践の場にはすべて出向くようにした。ただし、女兒がほぼ毎日元気に通学していたこと、毎日日本語を勉強して先生からの連絡帳をみる習慣ができた母親が、子どもの成長とともに日本社会のメンバーとしての意識を自ら高めていったことに支えられていたことを忘れてはならない。

③成果・期待される波及効果等

研究を実施して得られた成果および期待できる波及効果について記述してください。

本研究では、英国のコミュニティセンターがクルドの文化的価値を保持できる空間であること、また居場所・逃げ場として、コミュニティケアを促進するうえでセンターの有効性が確認された。クルドの政治的な背景と文化的価値をメンタルヘルスに関連付けたことは、対象者による、迫害から逃れ、数十年経ったとしてもディアスポラな存在という自認が浮かび上がった。難民や庇護申請者への理解が途上な日本で学ぶ必要のある視点である。日本人の人権意識を高め、排外主義的な雰囲気が解消される道筋へとつなげることが期待される。

④成果物

本研究について発表した論文、刊行物、シンポジウム等の情報を記載してください。

参照 URL がある場合はそれを含めてください。

(学会発表)

Miura, N. 2023. 4. Geographical spaces as an island nation for refugees and asylum seekers: A case study of Kurds in Japan. IGU Thematic Conference Osaka 2023

三浦尚子 2023. 11. 仮放免の障がい児の「生」とケアの技法. 人文地理学会 2023 年大会.

三浦尚子ほか 2023.12. ソーシャルワーカーからみた入管収容問題. 第 66 回日本病院・地域精神医学会神奈川大会 交流会企画.

Miura, N. 2024. Xenophobic behavior against suburban Tokyo Kurdish community settlement: With support of the concept of affects. IGC 2024 Dublin.

長谷川真実・三浦尚子 2024.11. ソーシャルワーカーからみた入管収容問題 2024—ヘイトスピーチと人権—多文化共生社会を目指すソーシャルワーク実践. 第 67 回日本病院・地域精神医学会兵庫大会 交流会企画

(メディア報道)

三浦尚子 2025.1. 埼玉県川口市の在日クルド人コミュニティ—排斥の力と抗う力が拮抗するホットスポット、「ワラビスタン」という磁場. 図書新聞.

(作品)

在日クルド人と共に. 2023.10. クルド料理のレシピ. Immigration Museum Tokyo 2023.

⑤写真

研究実施中の様子、成果物等の写真を掲載してください。(各写真にキャプションを付けてください。)



左から、目抜き通り沿いのレストラン・ロンドンのネウローズ・センターの中庭とオリーブの木・センターのホールによくいた黒猫・エジンバラのネウローズの炎